

福岡市埋蔵文化財調査報告書第913集

徳永古墳群 4

—徳永古墳群H群第5次調査報告書—



2006

福岡市教育委員会

徳永古墳群 4

— 徳永古墳群H群第5次調査報告書 —



2006

福岡市教育委員会

序

福岡市西部に位置する高祖山の北麓には、国指定史跡『今宿古墳群』をはじめとする古墳時代の墳墓群が数多く所在しています。現在にいたるまで、良好な自然環境とともにこれらの遺跡群も数多くが残されてきました。

しかしながら近年、西区元岡・桑原地区への九州大学統合移転や、西九州自動車道路の開通に伴い、周辺の歴史的環境は大きく変わろうとしています。福岡市では、これらの開発によって失われていく貴重な埋蔵文化財を後世に記録として残していくため、発掘調査を実施しています。

本書は、個人専用住宅の建設に伴い福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、徳永古墳群H群第5次調査の成果を報告するものです。徳永古墳群は、広義の今宿古墳群を形成する一支群であり、今回の調査では古墳時代後期の大型円墳が検出されました。今後、本書が文化財への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として内外で活用していただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、発掘調査から本書の作成にいたるまで、多大なご協力をいただきました植田恵美子様をはじめ、徳永地区の皆様等、関係各位に厚く御礼申し上げます。

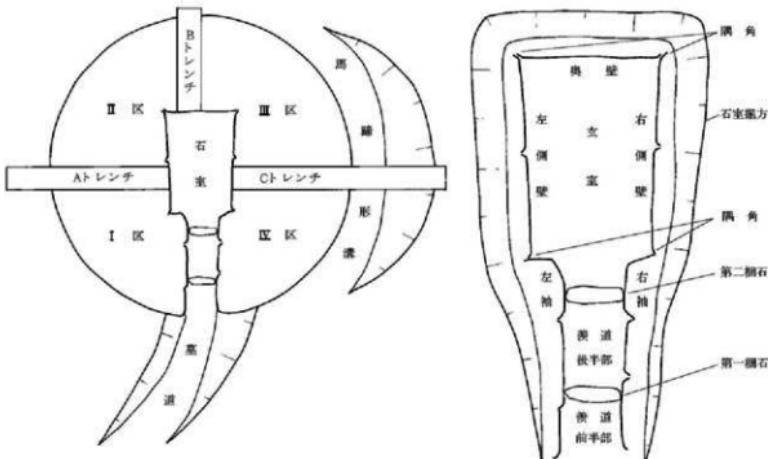
平成18年12月28日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例　　言

- 本書は、個人専用住宅建築に伴い福岡市西区大字徳永384-20で発掘調査を実施した徳永古墳群II群第5次調査の報告書である。
- 調査記録の作成および整理分担は、次のとおりである。
遺構実測·····松浦一之介、木下博文
遺物実測·····松浦一之介、谷直子（九州大学大学院生）
遺構写真撮影·····松浦一之介
遺物復元·····木下久美子、田中由紀、宮崎由美子、長浦美美子
金属製品保存処理···比佐陽一郎、片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）
製　図·····松浦一之介、木下久美子、山口朱美
本文執筆·····松浦一之介
- 本書で使用した方位は磁北であり、座標は国土調査法第II系に據る。また、標高は東京湾平均海面高度（T.P.）に據る。
- 本書で使用した地図は福岡市発行の福岡市都市計画図を原図としている。
- 本書で使用した遺構の略号は、奈良文化財研究所の用例である。
- 本書に関わる遺物および記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
- 本書の編集は、松浦一之介が行った。
- 本書で使用する墳丘に設定したトレンチの名称とそれに区画される墳丘各区の番号、古墳および石室各部位等の呼称は、下図に示した通りである。



本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	2
第3章 調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 10号墳	4
(1) 位置と現況	4
(2) 墳丘	4
(3) 内部主体	14
(4) 出土遺物	16
3. 12号墳	17
(1) 位置と現況	17
(2) 墳丘	17
(3) 内部主体	20
(4) 出土遺物	20
4. 焼土坑	20
(1) SK-01	20
(2) SK-02	20
(3) SK-03	21
第4章 まとめ	22

図版目次

図 1 徳永古墳群分布図 (縮尺1/8,000)	3
図 2 調査区現況測量図 (縮尺1/200)	4
図 3 10号墳地山整形測量図 (縮尺1/100)	5
図 4 10号墳地山整形と石室掘方 (北東から俯瞰)	5
図 5 10号墳地山整形 (北東から)	5
図 6 10号墳墳丘遺存状況図 (縮尺1/100)	7
図 7 10号墳墳丘遺存状況 (北東から俯瞰)	7
図 8 10号墳墳丘遺存状況 (北東から)	7
図 9 10号墳墳丘断面図 (縮尺1/100)	8
図10 10号墳墳丘断面 (南西から)	8

図11	10号墳A トレンチ土層（西から）	8
図12	10号墳C トレンチ土層（南から）	8
図13	10号墳各トレンチ土層断面図（縮尺1/40）	9
図14	10号墳墳丘第1構築過程と外護列石実測図（縮尺1/100）	10
図15	10号墳墳丘第1構築過程と外護列石（北東から俯瞰）	10
図16	10号墳墳丘第1構築過程と外護列石（北東から）	10
図17	10号墳墳丘第2構築過程と外護列石実測図（縮尺1/100）	11
図18	10号墳墳丘第2構築過程と外護列石（北東から俯瞰）	11
図19	10号墳墳丘第2構築過程と外護列石（北東から）	11
図20	10号墳墳丘第3構築過程と外護列石実測図（縮尺1/100）	12
図21	10号墳墳丘第3構築過程と外護列石（北東から俯瞰）	12
図22	10号墳墳丘第3構築過程と外護列石（北東から）	12
図23	10号墳墳丘第4構築過程と外護列石実測図（縮尺1/100）	13
図24	10号墳墳丘第4構築過程と外護列石（北東から俯瞰）	13
図25	10号墳墳丘第4構築過程と外護列石（北東から）	13
図26	10号墳石室実測図（縮尺1/40）	14
図27	10号墳石室全景（奥壁側から俯瞰）	15
図28	10号墳石室全景（羨道側から）	15
図29	10号墳石室左側壁（羨道側から）	15
図30	10号墳石室右側壁（羨道側から）	15
図31	10号墳出土遺物実測図（縮尺1/4）	16
図32	12号墳墳丘遺存状況図、地山整形測量図及び墳丘断面図（縮尺1/100、1/60）	18
図33	12号墳墳丘断面（南から）	19
図34	12号墳墳丘遺存状況（北から）	19
図35	12号墳地山整形と石室掘方（東から）	19
図36	12号墳石室全景（羨道側から）	19
図37	12号墳石室右側壁（西から）	19
図38	12号墳石室実測図（縮尺1/40）	19
図39	焼土坑および出土遺物実測図（縮尺1/40、1/3）	21
図40	S K- 01全景（北東から）	21
図41	S K- 02全景（西から）	21
図42	S K- 03全景（北東から）	21

遺跡調査番号	0 3 5 2		遺 跡 略 号	TKK- H- 5	
地 番	福岡市西区大字徳永字アラタ384-20		分布地図番号	周船寺120・飯氏121	
開 発 面 積	924.0 m ²	調査対象面積	524.5 m ²	調 査 面 積	524.5 m ²
調 査 期 間	平成15年11月4日～平成16年1月20日				

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

平成15年4月1日、植田恵美子氏より、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第1課）に対し、福岡市西区大字徳永字アラタ384-20地内の924m²について埋蔵文化財の有無に関する照会があった。これを受け埋蔵文化財課では、同申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である徳永古墳群H群の範囲に含まれることから、同年4月7日に現地踏査を行った。その結果、申請地内において円墳2基を確認し、設計変更を含めた現地での保存を協議した。しかしながら、設計変更是不可能と判断され、申請地内での遭構の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした記録保存のための発掘調査を実施することになった。

調査対象面積は、申請地内のうち924.0m²とし、実際の調査面積は524.5m²である。協議の結果、平成15年10月14日に発掘調査に関する事前協議確認書を締結し、平成15年11月4日から平成16年1月20日まで発掘調査を実施した。なお、整理報告は平成18年度に行った。

2 調査の組織

調査委託	植田 恵美子
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
教 育 長	植木 とみ子（現任） 生田 征生（前任）
文化財部長	山崎 純男（現任） 堀 徹（前任）
試 挖	埋蔵文化財課事前審査係（現 埋蔵文化財第1課事前審査係） 係長 濱石 哲也（現任） 池崎 讓二（前任） 担当 井上 蘭子（前任） 久住 猛雄（前任）
発掘調査	埋蔵文化財課調査第1係（現 埋蔵文化財第2課調査第2係） 課 長 力武 卓治（現任） 山崎 純男（前任） 係 長 米倉 秀紀（現任） 力武 卓治（前任） 担 当 松浦 一之介 庶務担当 文化財整備課（現 文化財管理課） 課 長 榎本 芳治（現任） 平原 豪（前任） 管理係長 栗須 ひろ子（現任） 市坪 敏郎（前任） 管 理 係 烏越 由紀子（現任） 中岳 圭（前任）
発掘作業	梅野 真澄、木田 ひろ子、小題 静子、柴藤 清志、田中 和粘、田中 筆 辻 節子、辻 哲也、徳永 洋二郎、永井 ゆり子、西川 吾郎、西口 キミ子 古庄 孝子、松本 順子、三谷 朗子
整理作業	木下 久美子、田中 由紀、長浦 芙美子、宮崎 由美子、谷 直子

尚、発掘調査から報告書作成にいたるまで、植田恵美子氏をはじめ、徳永地区の地域住民等関係各位には多大なご協力とご理解とご協力をいただいた。記して謝意を表する次第である。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

徳永古墳群H群は今宿平野の西部、福岡市西区大字徳永字アラタ、下引地及び大字女原字上谷、浅ヶ谷、丸尾にまたがって所在する総基数27基からなる古墳時代後期を中心とする円墳群である。

今宿平野は、東が長垂丘陵によって早良平野と、西は瑞梅寺川によって糸島平野と画される東西約3kmの範囲に広がっている。北は、長垂から今山の間に形成された砂嘴を北限とし、今津干潟を介して糸島半島と接している。砂丘の後背湿地は、近世の干拓によって現在見られるような田園地帯が広がっているが、かつては西側に入江が深く湾入していたことが分かっている。平野東部の叶岳（標高339.5m）と高祖山の間には、狭隘な扇状地が形成されているが、概して平野は非常に狭小である。

平野内の弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡は、その立地から、砂丘上、平野東部の扇状地、高祖山北麓の丘陵上先端部の3種に大別される。

砂丘上の遺跡としては、今宿遺跡がある。弥生時代前期の櫛棺墓群や古墳時代の製塩土器、滑石製漁錐等が相当量出土している。また砂丘の先端にある今山遺跡は、玄武岩製石斧製作跡として学史にも登場する著名な遺跡である。

沖積地の遺跡としては、今宿平野の拠点的集落と考えられる今宿五郎江遺跡があり、弥生時代後期の大溝から多量の土器や木製品のほか、小銅鐸などが出土している。

丘陵先端部に立地する遺跡としては、大塚遺跡、女原遺跡、徳永遺跡などがある。このうち徳永遺跡では、6~7世紀にかけての竪穴住居跡が検出されており、本古墳群の被葬者との関連が想定されるが、規模は大きくなかった。また、古代の包含層からは越州窯青磁、綠釉陶器などの官衙の遺物が出土しており、大宰府鴻臚館の関連施設である主船司との関係が議論されたが、明確な構造は検出されなかった。

今回調査を行った徳永古墳群H群は、1970年、福岡県教育委員会によって「徳永アラタ古墳群」

として確認されたが、1978年に実行された本市教育委員会の分布調査によって、現在「徳永古墳群H群」として登録されている。徳永古墳群は、A~H群の8群41基からなり、徳永古墳群を形成する一支群である。またこれら支群中、H群は最大の規模である。本古墳群は、農地や植林地の造成等に伴い、今回の調査地点を含めてこれまで5次にわたる発掘調査が実施してきた。このうち18基は現在消滅している。また徳永古墳群は、広義の今宿古墳群を形成する一支群であり、群中最も西側に位置する支群である。

今宿古墳群は、高祖山（標高419.5m）北麓の小河川によってハサウエー状に開析された標高10~120m付近の小丘陵上に分布している。総基数は現在のところ約320基が確認されており、その立地から13~15の支群に分けられている。

また、今宿古墳群中の前方後円墳は、現在13基が確認されている。古墳群では、4世紀中葉から6世紀前半までの首長墓系譜を辿ることができ、山ノ鼻1号墳- 若八幡宮古墳- 鋤先古墳- 丸隈山古墳- 山ノ鼻2号墳- 今宿大塚古墳- 下谷古墳- 飯氏二塚古墳といった編年が組まれている。これらはすべて丘陵の先端部に立地しているのに対し、恩納原C-14号墳、上谷B-1号墳、本村A-1号墳、飯氏B-14号墳は群集墳の中に混在しており、築造時期も6世紀後半と考えられる。分布のあり方など前者とは異なった系譜をもつ新興階層の墳墓群と考えられている。

今宿平野には先述したように、十分な可耕地の確保が困難であり、古墳時代の大規模な集落遺跡が発見されていないものの、製塩、須恵器生産、製鉄といった生産活動と深い関わりがあるものと予想されている。製塩に関しては、今宿遺跡で相当量の製塩土器が出土していることは先に述べたが、高祖山山麓にはこれまで20ヶ所に及ぶ鉄滓散布地が確認されている。また、須恵器生産に関しては新聞窯跡が確認されており、総基数320基という大規模な古墳群の経営には、背景にこれらの生産活動に深くかかわった経済的背景が想定される。

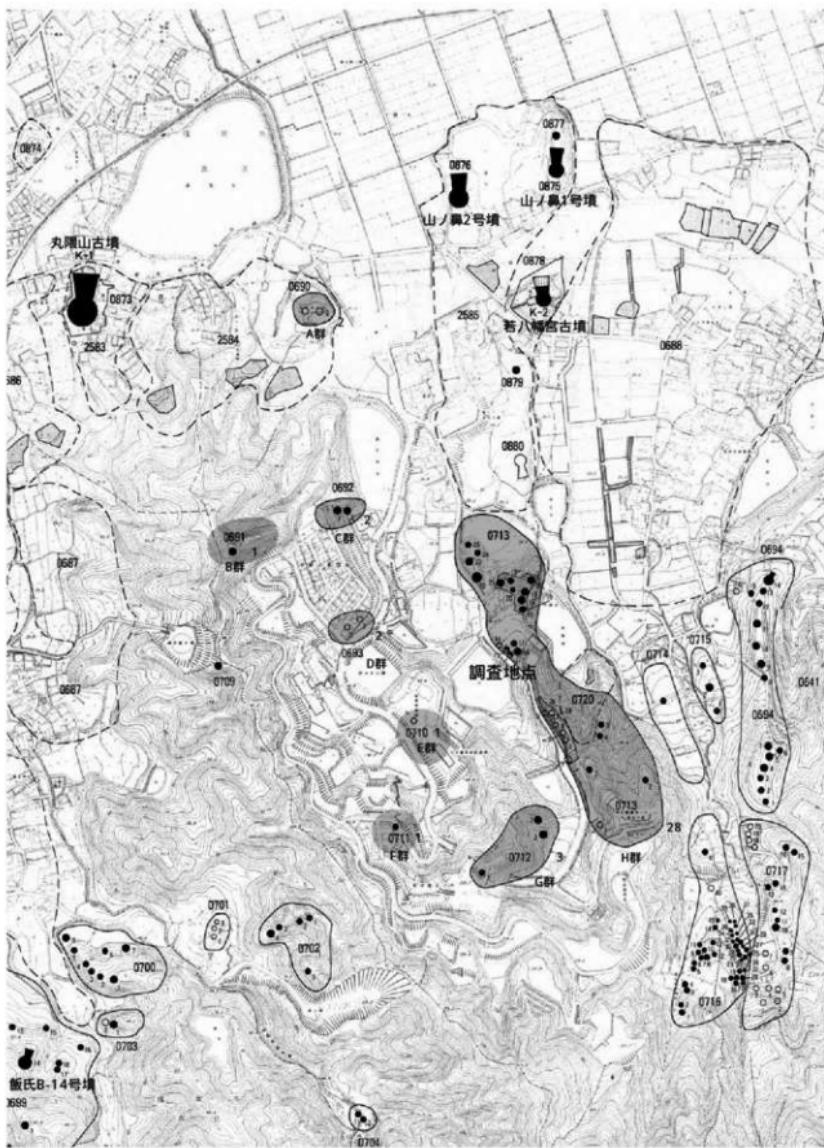


図1 德永古墳群分布図(縮尺 1/8,000)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

第5次調査地点は、福岡市西区大字徳永字アラタ384-20に所在する。調査対象は徳永古墳群H群のうち、10・12号墳の2基の円墳である。第4次調査地点の南側に隣接している。調査前の現況は雑木林で、現況での標高は約51~56mを測る。両基は丘陵の頂部付近に立地していたものと考えられるが、墳丘の西半部は道路の開削によって大きく削られていた。

調査はまず現況測量を行った後、主体部を掘り下げ、その主軸に沿って墳丘の規模と構造を把握するために2ないし3本のトレンチを設定し掘削した。このうち10号墳は、墳丘の構築段階が5段階程度に分かれている事を確認したため、各工程毎に墳丘を捲り、測量図と写真による記録を作成した。盛土除去後、墳丘基底面、石室掘方、石室基底面まで調査した。

2. 10号墳

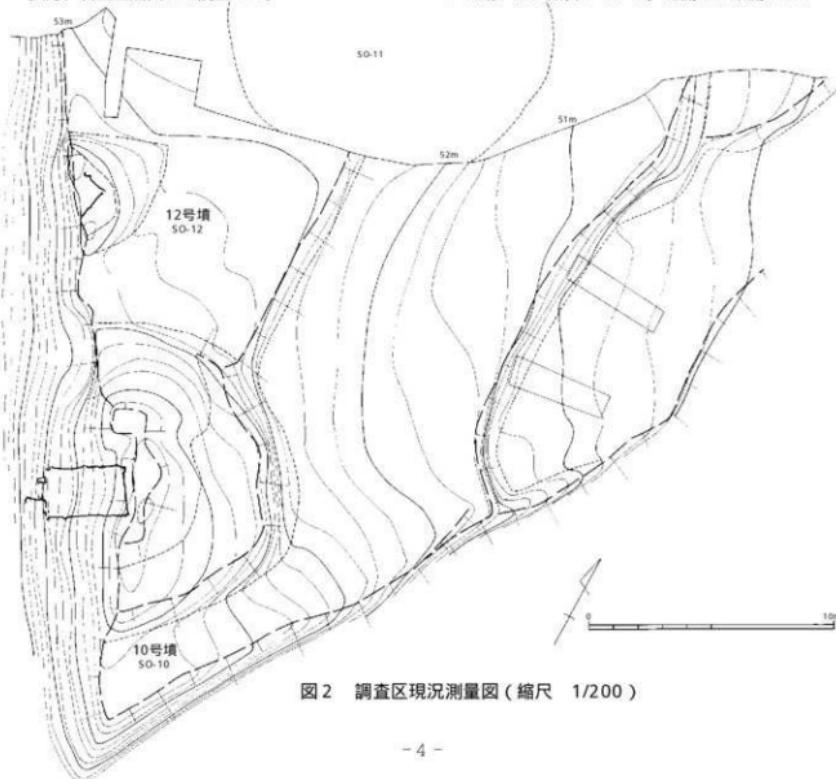
(1) 位置と現況(図2)

10号墳は調査区南側の丘陵頂部に位置し、現況の最高所で標高55.75mを測った。北側に隣接する12号墳とは、石室の中心間で約12m離れている。西半部は大きく削平され崖状を呈していた。

(2) 墳丘(図3~5)

地山整形(図3~5)

墳丘建築に伴う地山整形は、丘陵北側から東側にかけての墳裾と南側の平坦面の削り出し、及び石室掘方からなると考えられる。西半部は道路開削時の削平によって全く遺存せず、状況は不明である。墳丘基底面は、旧表土層の有機質腐食土層を検出したことから、丘陵の旧地形をそのまま利用しているものと推測され、東側から西側に向かって緩やかに傾斜している。北側から東側にかけ



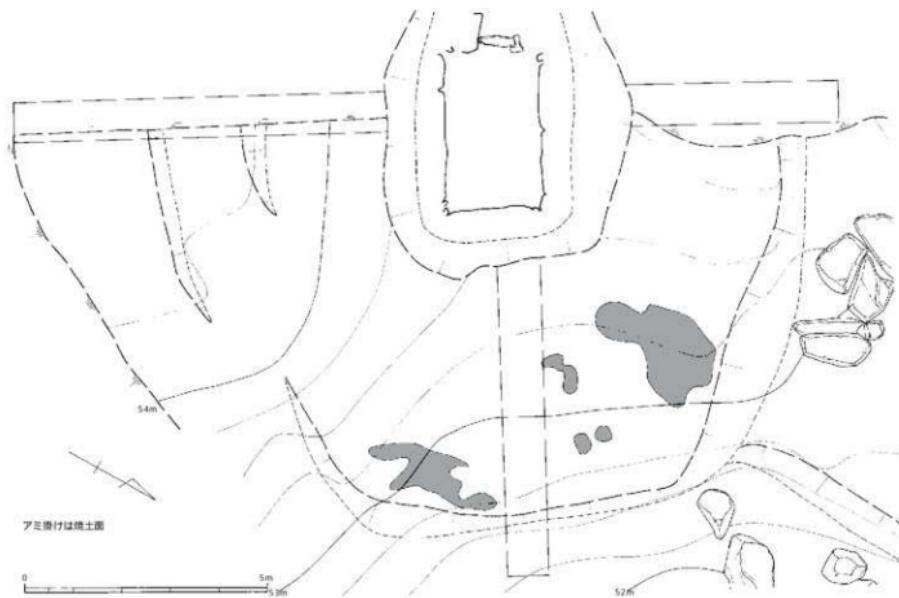


図3 10号墳地山整形測量図（縮尺 1/100）



図4 10号墳地山整形と石室掘方（北東から俯瞰）



図5 10号墳地山整形（北東から）

ての墳裾の削り出し及び南側の地山整形の端部は、石室奥壁の中心から約7mの距離にあり、半円形を描く。標高53.0m～53.75m付近で行われ南側に向かって緩やかに傾斜している。東側が一部削平されているものの、遺存状況は概ね良好で、北側の12号墳との境界は花崗岩の露頭が検出され、築造当時、これ以下の掘削が不可能だったと考えられる。南側の墳丘基底面の整地は標高54.2m付近

と、標高54.3m付近で2段に亘って行われている。

墳丘基底面では、図3に示したように、部分的に多量の炭化物片を含む焼土面を検出した。これは、地山整形時に下草を払う目的で周辺を焼き払った痕跡の可能性とも考えられるが、墳丘III区の地山整形面で少量の鉄片が出土していることなどからも、古墳築造に伴う何らかの祭祀の痕跡の可能性も考えられる。

石室掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ平行に掘削されたものと考えられる。平面形は隅丸長方形を呈し、幅は5m、長さは5.5mが遺存する。羨道側が窄まると考えられるが、削平され遺存しない。墳丘基底面から深く掘削され、最大約2mを測る。

盛 土 (図9～25)

墳丘は、版築状の盛土と外護列石を多用して非常に丁寧に構築され、その過程は大きく5ないし6段階程度に分けられる。盛土は、地山由來の赤・黄・灰・橙・黒褐色等の粘質土ブロックを主成分とし、これらを単一で使用したり、あるいは複数色の粘質土や、粗砂・細礫等を混和する層が確認され、非常に硬く敲き締められる。各層は5～10cm前後で分層し図化したが、実際の単位は更に細かく、1～3cm前後に分層可能な箇所もあった。また版築の厚さは、石室に近い方が非常に細かく丁寧であり、外側がやや厚く硬度が落ちる層も観察される。外護列石は、各工程の墳丘裾部付近で構築されている。

第1工程は、石室の構築と並行して行われる石室掘方の裏込と石室を被覆する工程と推測されるが、石室上半が破壊されており明確でない。上半部の版築は丁寧で、墳丘II・III区では、石室の中心から半径約3.5m付近の標高54.0～54.5m付近で外護列石を配していた。この外護列石は、地山整形面から10～50cm程度盛土した後に、長さ10～100cm程度の花崗岩転石を用い、最大3段程度組まれている。丘陵下側への墳丘盛土の崩落防止を目的としたものと考えられ、地山整形時の標高が低い墳丘II区側で特に高く組まれている。更に外護列石の背後には、盛土により溝と土手を構築している。墳丘II区での土手の高さは、溝の底面から最大30cm程度を測る。土手と溝はIII区側に向かって緩やかに立ち上がり、III区で高低差がなくなっている。土手状の盛土の版築はやや厚い。

また墳丘II・III区の填縫でも、石室奥壁の中心からの距離約7mを測る標高約53.0m付近で外護列石を確認した。墳丘II区の馬蹄形溝付近と、III区の南半部では検出されておらず、地山整形面の傾斜がやや強い部分のみで、墳丘の崩落防止を目的として構築されたと考えられる。また、墳丘が完成した時点でも列石の表面が露出していたものと考えられ、墳丘の装飾効果を兼ねたものと推測

される。第一工程でのこの外護列石は、地山整形面から10cm程度盛土した後に、長さ10～70cm程度の花崗岩転石を1段並べて構築される。

第2工程は、前工程の盛土を30～60cmの厚さで被覆するように行われる。墳丘II区では、石室の中心から約4mの標高54.0m付近で外護列石を確認した。この外護列石は、前工程の外護列石のほぼ直上付近に位置し、長さ10～60cm程度の花崗岩転石を1段並べて構築している。このほか列石にはならないものの、盛土内に同様の花崗岩転石を混入しており、墳丘をより堅固なものにしている。前工程で構築された溝は、この工程の盛土で埋められており、墳丘中央部と墳裾との間にやや広い平坦面が確保されている。

第3工程は、まず前工程で構築した中央部墳丘の周辺を盛土し平坦面を造成している。この平坦面は、石室の中心から半径約5.5m付近までの範囲で行われている。墳丘II区側で標高54.4m、墳丘III区側で標高約55.0mを測り、北側に向かって緩やかに傾斜している。平坦面の造成後は、10～50cmの厚さで前工程の盛土を更に被覆している。また墳丘II区では、石室の中心から半径約4mを測る盛土の裾部付近で小規模な外護列石が検出された。この外護列石の標高は約54.5mを測り、数個を並べるのみである。

第4工程は、前工程の墳丘を20～50cmの厚さで被覆するように盛土しているが、上半は既に失われている。また墳丘II・III区では、石室の中心から半径約4.5mを測る盛土の裾部で外護列石が検出された。列石の標高は、約54.5～55.0mを測る。使用される石材は、長さ約50cmを測り、組まれておらず等間隔に並べているのみである。

第5工程も前工程と同様で、第3工程で構築された平坦面の上を、前工程の墳丘を20～50cmの厚さで被覆するように盛土している。墳丘端部では、第1・3工程で構築された外護列石の上に、更に3段程度の外護列石が組まれている。使用される石材は長さ10～60cm程度の花崗岩転石である。墳丘II区では、第5工程以上の盛土が大きく流失しているが、墳丘III区では第6工程の盛土も確認された。

第6工程の盛土は、墳丘III区でのみ確認された。この工程の盛土は、第3工程で構築された平坦面

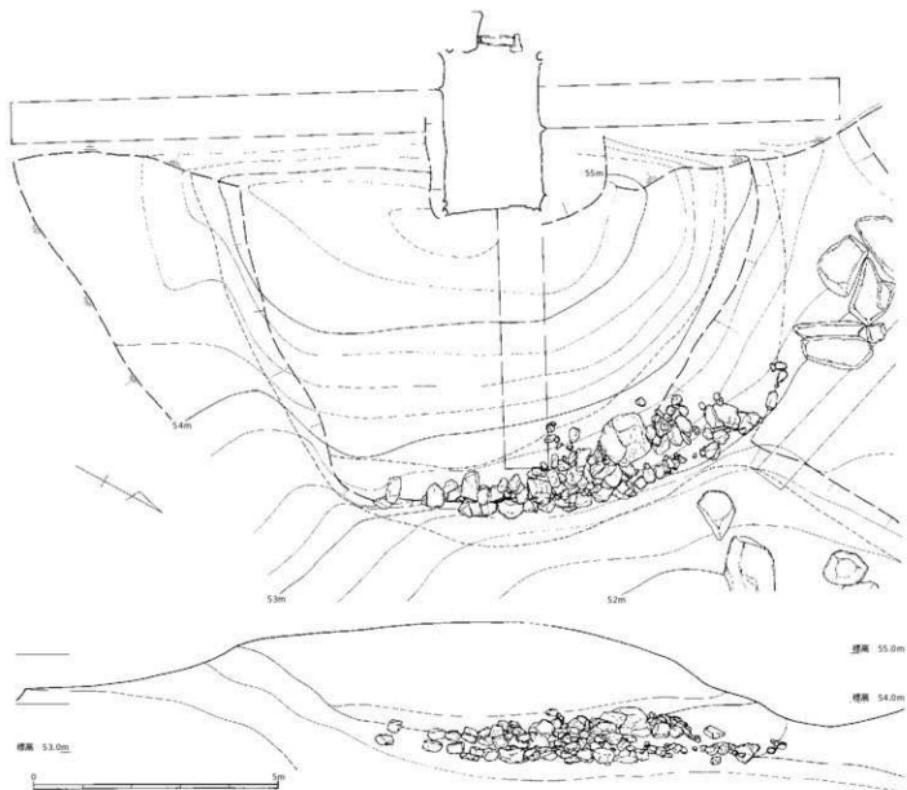


図6 10号墳墳丘遺存状況図(縮尺 1/100)



図7 10号墳墳丘遺存状況(北東から俯瞰)



図8 10号墳墳丘遺存状況(北東から)

10号墳・墳丘

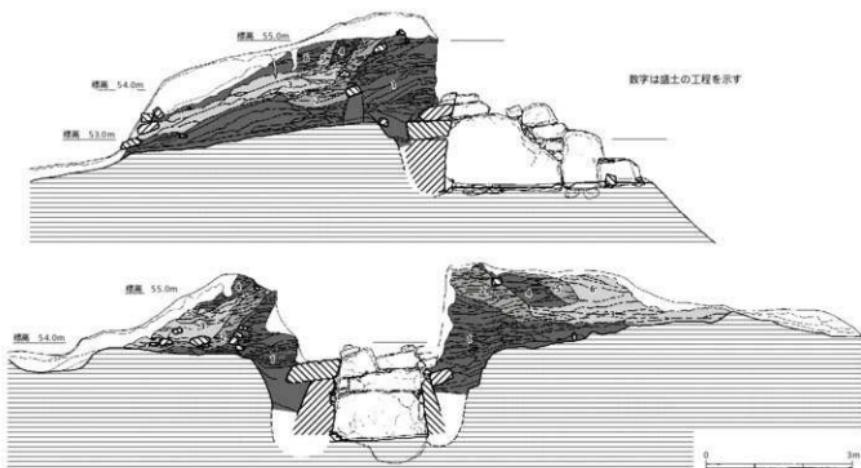


図9 10号墳墳丘断面図(縮尺 1/100)



図10 10号墳墳丘断面(南西から)



図11 10号墳Aトレンチ土層(西から)



図12 10号墳Cトレンチ土層(南から)

各トレンチ土層解説

■黄褐色粘土ブロック主流。表面状に非常に硬く緻密まる。粗砂や細礫を多く含み、他の色調の砂質土が混入する土層も観察される。

■黄褐色粘土ブロック主流。表面状に非常に硬く緻密まる。粗砂や細礫を多く含み、他の色調の砂質土・粘質土が混入する土層も観察される。

■黒・灰褐色粘質土ブロック主流。表面状に非常に硬く緻密まる。粗砂や細礫を多く含み、他の色調の砂質土・粘質土が混入する土層も観察される。

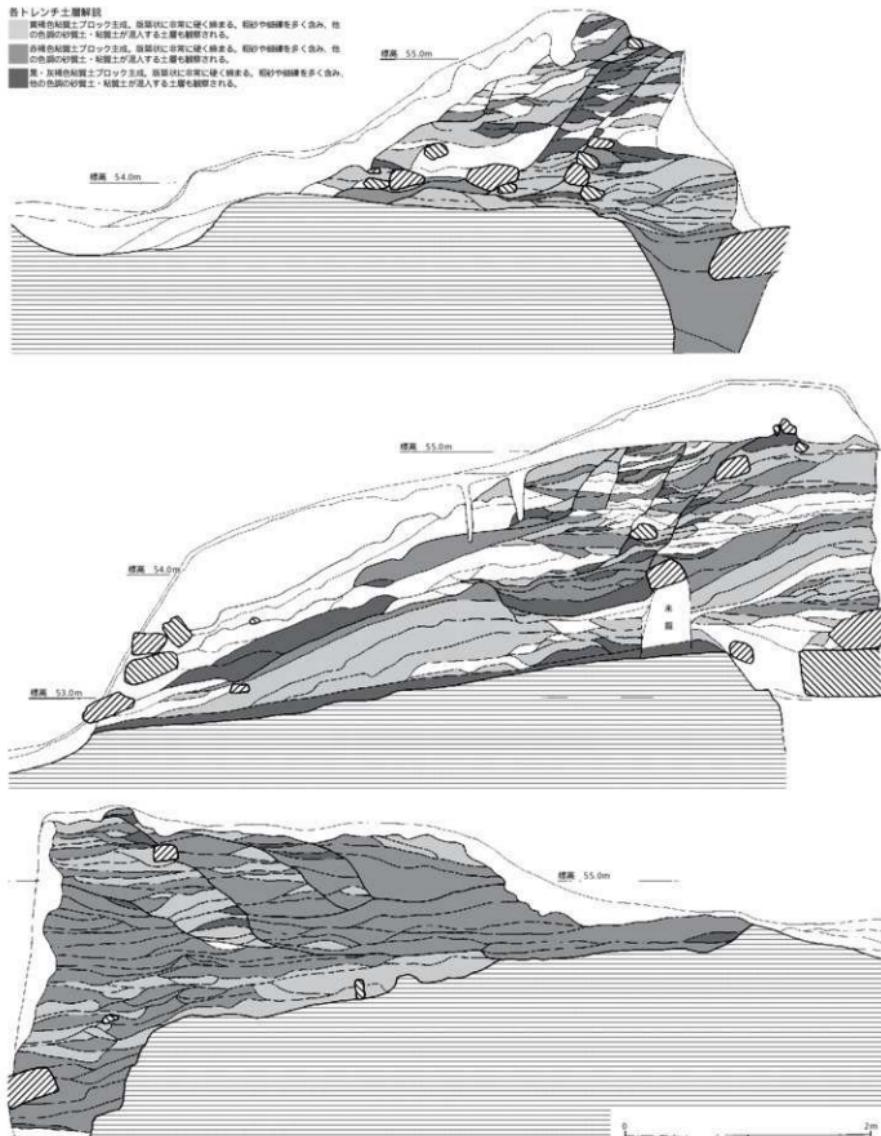


図13 10号墳各トレンチ土層断面図(縮尺 1/40)

10号墳・墳丘

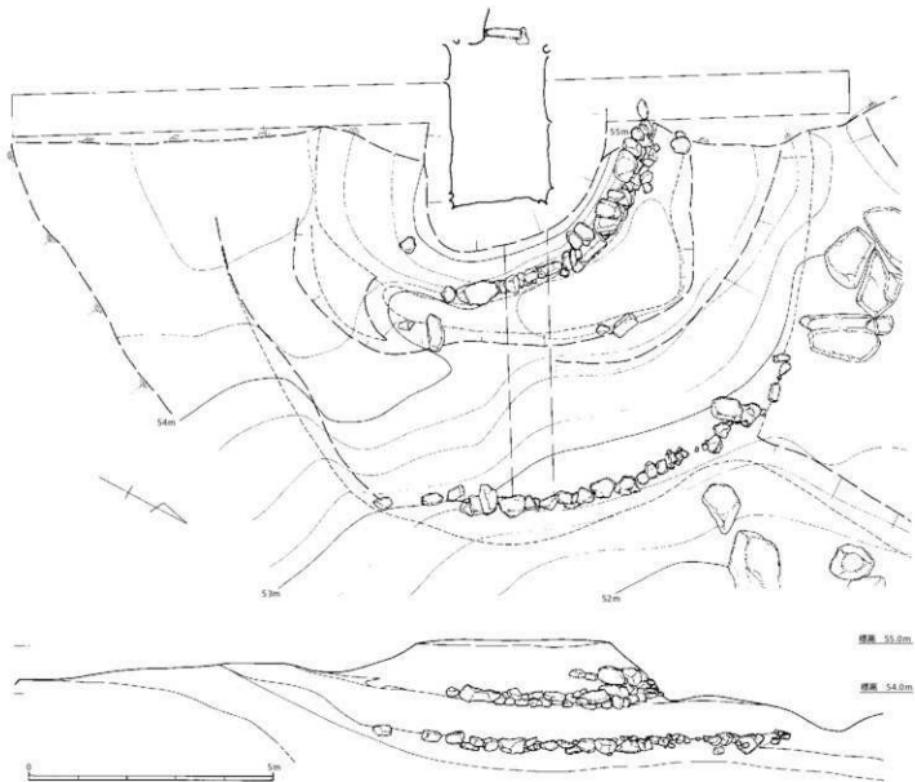


図14 10号墳墳丘第1構築過程と外護列石実測図（縮尺 1/100）



図15 10号墳墳丘第1構築過程と外護列石（北東から俯瞰）



図16 10号墳墳丘第1構築過程と外護列石（北東から）

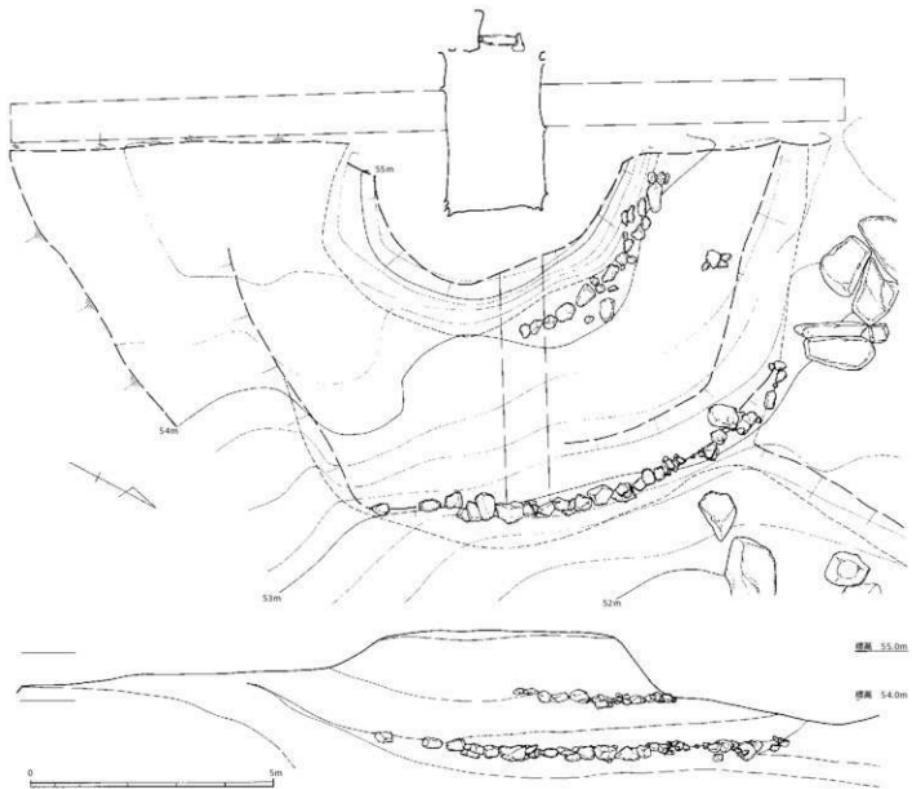


図17 10号墳墳丘第2構築過程と外護列石実測図(縮尺 1/100)



図18 10号墳墳丘第2構築過程と外護列石(北東から俯瞰)



図19 10号墳墳丘第2構築過程と外護列石(北東から)

10号墳・墳丘

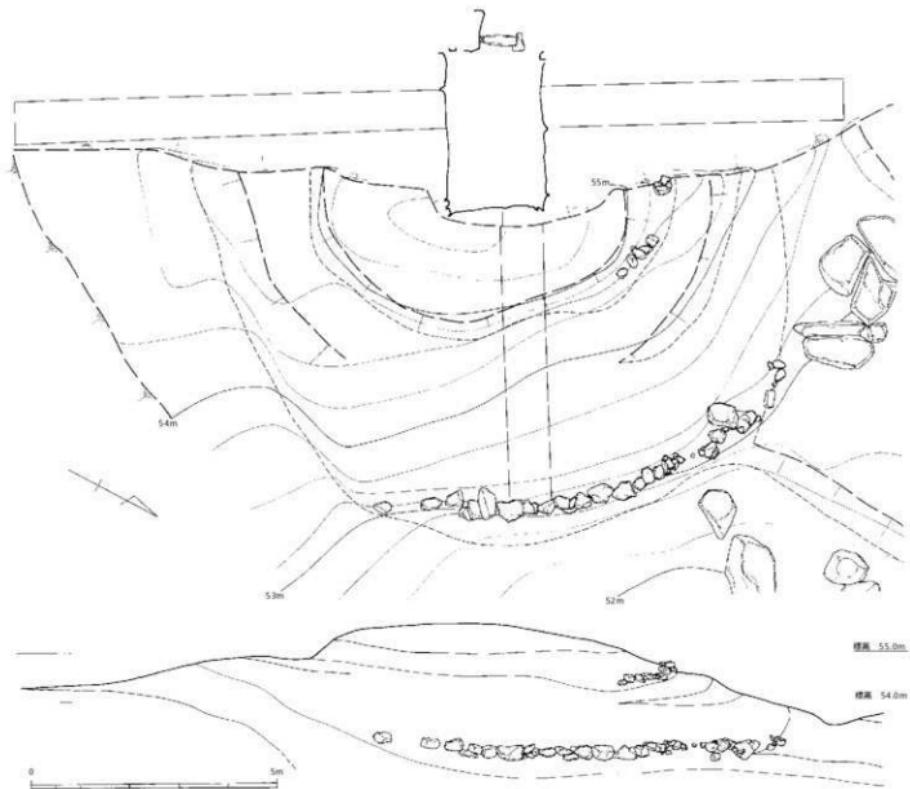


図20 10号墳墳丘第3構築過程と外護列石実測図（縮尺 1/100）



図21 10号墳墳丘第3構築過程と外護列石（北東から俯瞰）



図22 10号墳墳丘第3構築過程と外護列石（北東から）

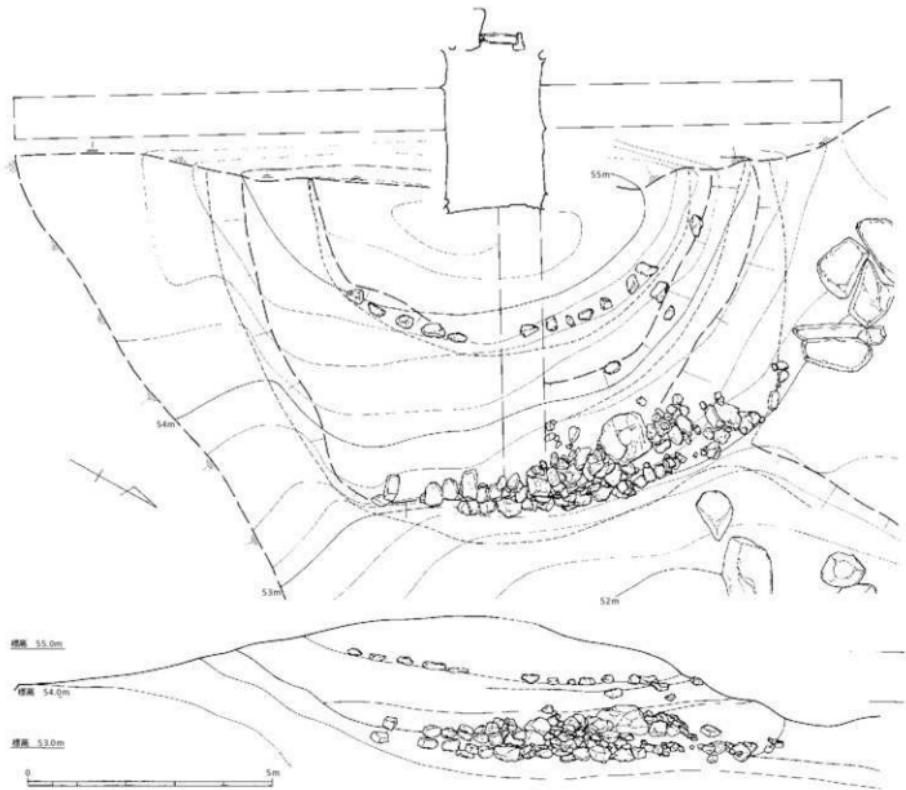


図23 10号墳墳丘第4構築過程と外護列石実測図(縮尺 1/100)



図24 10号墳墳丘第4構築過程と外護列石(北東から俯瞰)



図25 10号墳墳丘第4構築過程と外護列石(北東から)

の上に、第5工程の盛土を被覆するように構築されている。各土層はやや厚く、硬度が落ちる。

また墳丘II区では、標高54.0m付近で段築が確認され、III区の地山整形面に対応するものと判断される。段築以下の1段目斜面には外護列石が露出しており、装飾性を高める狙いがあると考えられる。

調査の結果、10号墳は2段築成で、直径15mの円墳に復元される。

(3) 内部主体(図26~30)

10号墳の内部主体は、南西側に向かって開口する両袖式単室の横穴式石室である。玄室主軸はN-56.5°-Eを測る。石室は、玄室下半と袖石の一部を留めるに過ぎない。

玄室

玄室の規模は、奥幅188cm、前幅196cm、右側壁長320cm、左側壁長312cmを測る。平面

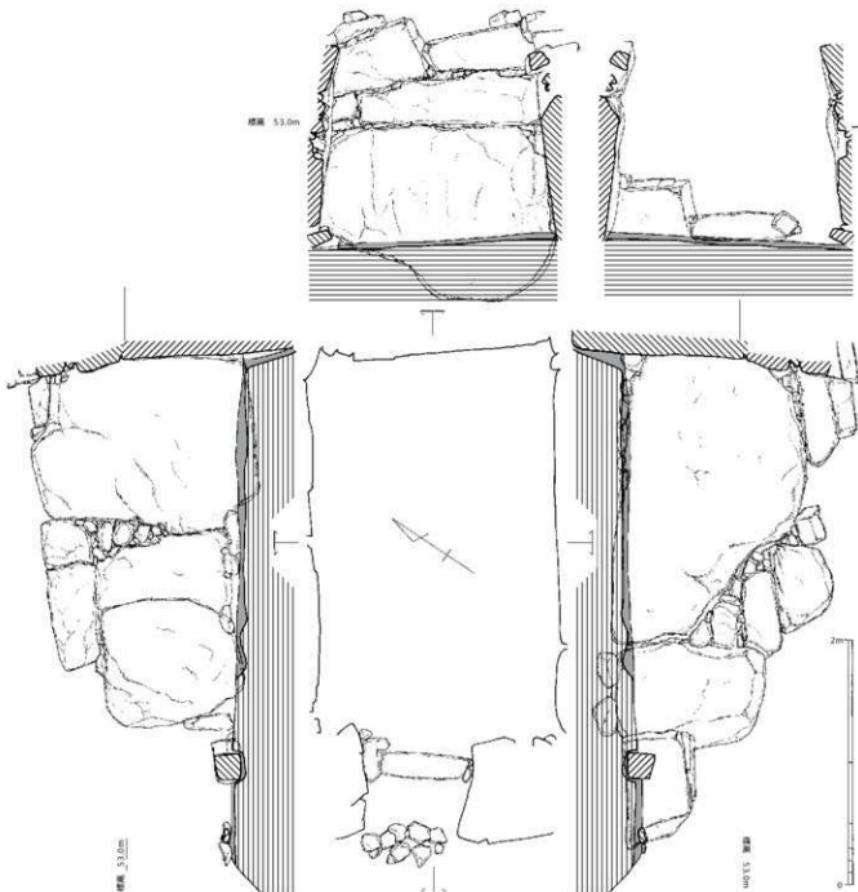


図26 10号墳石室実測図(縮尺 1/40)



図27 10号墳石室全景（奥壁側から俯瞰）



図28 10号墳石室全景（羨道側から）



図29 10号墳石室左側壁（羨道側から）



図30 10号墳石室右側壁（羨道側から）

形は長方形を呈する。遺存する壁体の石材は、全て花崗岩転石と割石である。

奥壁は、3段が遺存している。腰石は高さ140cm×幅190cmの割石を立てて使用している。下方の形状が不整形で、石室基底面の地山を深く掘り込み、根石を多用して安定を図っている。平坦面を天端に向けている。また2段目は、高さ50cm×長さ150cm×厚さ90cm程度のやや大振りな石材を横位に積み、概ね横方向に目路を通している。左側壁との間には、小振りな石材を使用している。3段目の石材は、高さ40cm~50cm×長さ80~90cm×厚さ80cm程度の石材を横位に置いて使用している。各石材の間隙には、小礫を充填している。

左側壁は、2石を用いて腰石としている。奥壁側

の石材が大きく、高さ190cm×幅150cm程度の転石を縦位に立てて使用している。この石材の天端は、奥壁壁体の3段目と、また左側壁玄門側石材の2段目とほぼ目路が揃っている。玄門側の腰石は、高さ120cm×長さ160cm×厚さ80cm程度の転石を横位に据えて使用している。上位石材や埴丘盛土の重量で、縦方向に亀裂が生じている。2段目の石材は小振りである。また、間隙には小礫を充填している。

右側壁は、左側壁と同様2石を腰石とし、奥壁側の石材が遺存する石室石材中最大である。この石材は、高さ150cm×長さ240cm×最大厚40cmを測り、扁平でやや不整形な転石を立てて使用している。玄門側の石材は、高さ120cm×幅90cm程度の石材を立てて使用しており、左側壁の玄門側腰石の高さとほぼ

同一である。両腰石の間隙には、大小の石材を充填しており、横方向に目路を通す意図が取察される。

玄門部は両袖であるが、左側壁は石材が完全に抜き取られている。但し、左袖は根石が遺存しており、これにより玄門幅は、88cmと推定される。右袖石は高さ50cm、長さ80cm、幅80cmを測り、横位に据えて使用している。2段目以上の石材は抜き取られているが、間隙に据えた小礫が数個残っている。

玄室床面には、敷石が敷設されていたものと推測されるが、完全に破壊され全く遺存しない。

羨道

羨道は玄門部が遺存するのみで、道路開削時の削平により全く遺存していない。床面には1ヶ所に樋石が敷設されている。樋石は玄門の端部に位置し、奥壁からの距離329cmを測る。石材は、長さ70cm程度の棒状の石材1石と小礫を用いている。また、床面には小礫で敷石が敷設されており、このことから樋石は第1、第2樋石の2ヶ所があったものと推測される。閉塞施設は破壊され遺存していない。

石室基底面の状況

石室基底面の状況は、石室床面の埋土を完全に除去して観察した。周壁に沿って、腰石の安定を図るために掘り込みが巡る。深さは床面から5~60cm程度を測る。また、腰石と地山の間には、10~40cmの礫を使用した根石が配される。特に大振りな石材を使用する奥壁および右側壁の奥壁側腰石周辺には、根石を多く用いて安定を図っている。

(4) 出土遺物(図31)

出土状況

内部主体は大きく破壊されており、石室内の副葬状況を示す遺物は皆無である。図示した出土遺物は、墳丘裾部などから破碎した状態で出土しているが、図31中の8のみは原位置を保っている可能性がある。遺物の総量は、コンテナケース1箱分である。

遺物(図31)

土師器

壺(7)

7は、器高11.6cm、口径10.3cm、胴部最大径12.7cmを測る完形品の壺である。口縁部は短く外反し、胴部との境界には明確な接ぎが認められる。胴部最大径以下には回転ヘラ削りを施す。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。

須恵器

高坏(1~4)

いずれもII区墳裾から出土した破片である。1は坏部小片で、脚部に剥離痕が見られる。底部には回転ヘラ削りを施す。2は脚部片で、4方に線状の透かしが残る。上端部には、坏部の剥離痕跡がみられる。胎土は精良で、焼成は良好である。1と同一個体の可能性もある。3は坏部から脚部にかけての破片で、口径12.1cmを測る。坏部下半には回転ヘラ削りを施す。脚部には、3方に長方形の透かしが残る。胎土は精良で、焼成は良好、色調は灰色を呈す。4は脚部片で喇叭状に外反し、脚端部は外上方に伸びる。

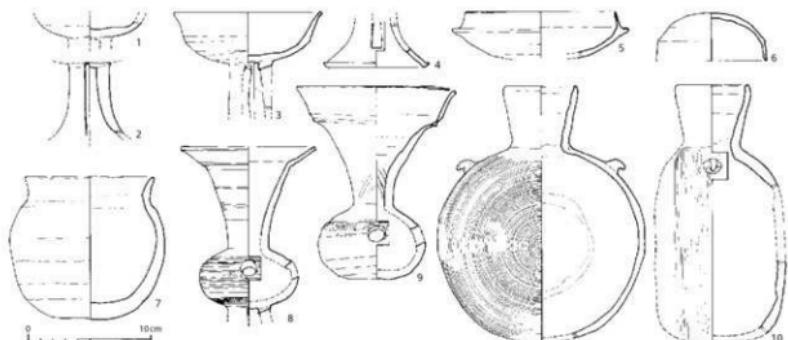


図31 10号墳出土遺物実測図(縮尺 1/4)

底径7.7cmを測り、3方に長方形の透かしが残る。胎土は概ね精良で、焼成は良好、色調は灰色を呈す。

坏 身(5)

5は口径12.2cm、受部径14.4cmに復元される小片である。口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部は丸く收まる。底部2/3に回転ヘラ削りを施す。胎土は精良で、焼成は良好、色調は灰色を呈す。

蓋(6)

6は器高3.9cm、口径9.1cmに復元される破片である。天井部が高く、外器面2/3に回転ヘラ削りを施す。口縁端部は丸く收める。胎土に白色粗砂を少量含む。焼成は良好で、色調は灰色を呈す。短頸壺の蓋か。

頸(8、9)

8は残存高13.7cm、口径10.6cm、頸部径3.4cm、胴部最大径8.0cmに復元される脚付頸である。頸部は緩やかに外反しながら立ち上がる。口縁部には明確な段を有し、更に外反する。頸部上半には力キ目その後、3ヶ所に沈線が2条ずつ施され、下方の背文はナデ消される。胴肩部と脚部との境界附近には、それぞれ2条の沈線が施され、その間を力キ目で埋めている。肩部下の沈線以下に外器面から穿孔される。胴底部の沈線間に刻目文が施文される。脚部は欠損するが、3方に長方形の透かし痕跡が残る。胎土には白色粗砂を少量含まれる。焼成は良好で、色調は灰色を呈す。II区墳裾から出土したが、供献された状態を留めている可能性がある。9は器高15.7cm、口径12.6cm、頸部径3.6cm、胴部最大径8.8cmを測る。頸部は緩やかに外反しながら立ち上がる。頸部と口縁部との境界には明確な段を有し、口縁部は上方に立ち上がる。胴肩部には2条の沈線が巡り、その間に刻目文が施文され、下の沈線付近で外器面から穿孔される。底部には回転ヘラ削りを施す。胎土は白色細砂を含み、焼成は良好で、色調は灰黄色を呈す。

提 瓶(10)

10は残存高20.5cm、口径5.8cm、胴部径17.0cmに復元される。口縁部は直立気味に僅かに外傾しながら立ち上がり、口唇部は丸く收める。胴部外器面は回転ナデを施した後、全体に力キ目を施す。肩部には鉤状の短い双耳が付く。胎土は概ね精良で、白色細砂を少量含む。焼成は良好で、色調は灰色を呈す。

3.12号墳

(1) 位置と現況(図2)

12号墳は、調査区北西端部の丘陵頂部に位置し、現況の最高所で標高54.25mを測る。南側に隣接する10号墳とは石室の中心間で約12m離れている。また、12号墳の北東側には、第4次調査で発掘された11号墳が位置し、石室の中心間で約15m離れている。

(2) 墳 丘

地山整形(図32、34)

12号墳が立地する丘陵は、地形の改変が激しいが、南東から北西に向かって延びていたものと考えられる。よって、墳丘築造に伴う地山整形は、丘陵東側から南側にかけての馬蹄形溝の掘削と、北側から西側にかけての墳裾の削り出し、及び墳丘基底面の整形と石室掘方からなるものと考えられる。しかし、南西側の状況は削平により全く不明である。

東側の馬蹄形溝は、断面が緩やかなU字形を呈する。最も遺存状況が良好なところで幅約2.5m、深さ約0.3mを測る。墳丘の北側で馬蹄形溝は終焉し、墳裾につながる。墳裾の削り出しは削平により明確には観察されなかった。墳丘基底面の整形は、標高53.4m～53.8m付近で行われているが、削平により大半が遺存していない。

なお、12号墳の周溝が10号墳の周溝を切っており、12号墳が後に築造されたものと考えられる。

石室掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してほぼ平行に掘削されたものと考えられるが、地形の改変により明確でない。平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。幅は2.2m、長さは2.5mが遺存する。羨道側が窄まると考えられるが、削平され遺存しない。墳丘基底面からの掘削深度は浅く、最大約0.6mを測る。

盛 土(図32～34)

盛土は、地山由来の赤・黄・灰・橙・黒褐色等の粘質土ブロックを主成分とし、これらを単一で使用したり、あるいは複数色の粘質土や、粗砂・細礫等を混和する層が確認され、硬く敲き締められる。各層は5～20cm前後に分層される。墳丘は大きく削平され、III区とIV区でごく一部を留めるに過ぎない。よって、墳丘の構築過程が明確で

12号墳・填丘

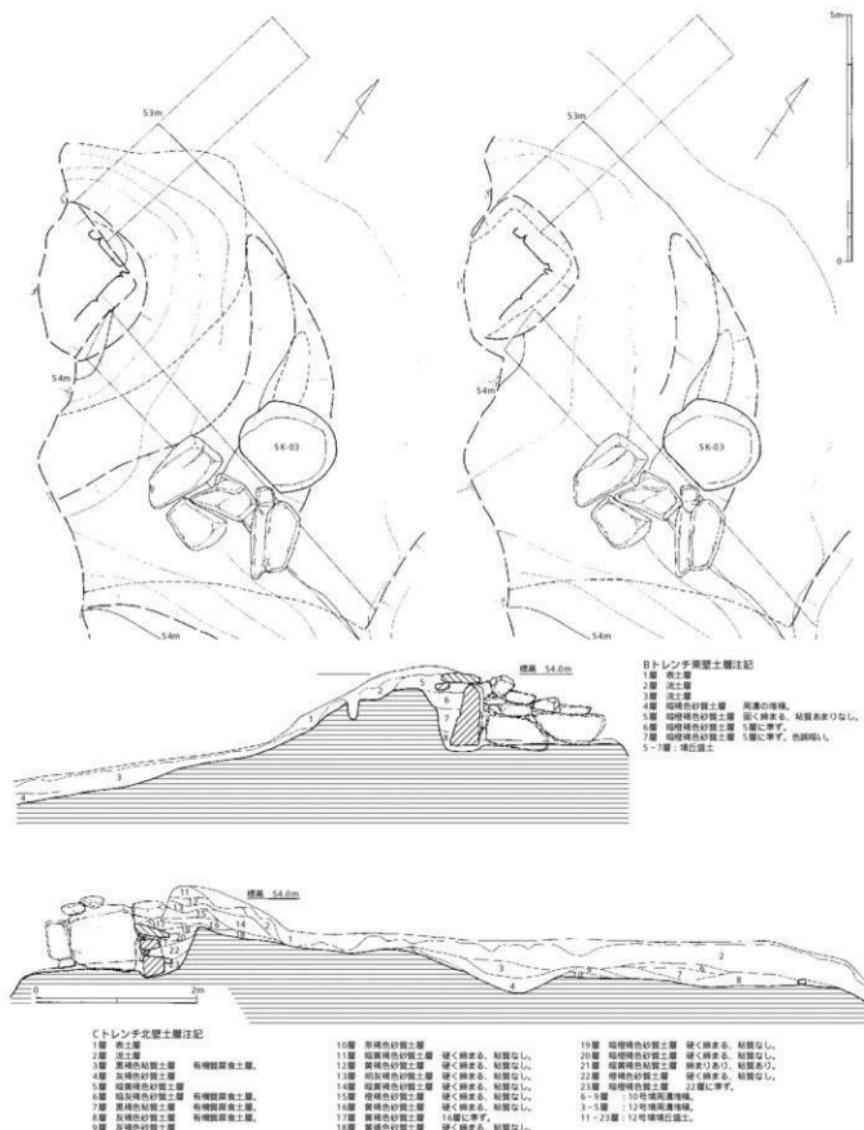


図32 12号填丘遺存状況図、地山整形測量図及び填丘断面図（縮尺 1/100、1/60）



図33 12号墳墳丘断面（南から）



図34 12号墳墳丘遺存状況（北から）



図35 12号墳地山整形と石室掘方（東から）



図36 12号墳石室全景（羨道側から）



図37 12号墳石室右侧壁（西から）

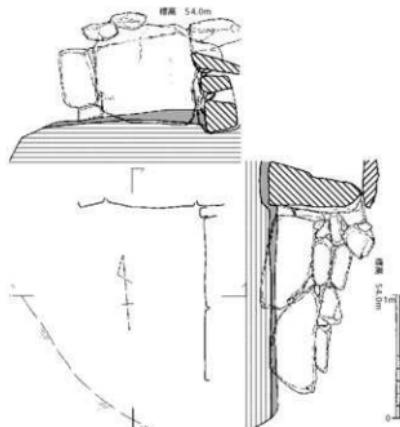


図38 12号墳石室実測図（縮尺 1/40）

ないが、盛土の工程は石室の裏込的なものと墳丘基底面より上位の盛土に分けることができる。盛土は、墳丘基底面から最大60cm程度が遺存している。外護列石等は確認されなかった。

調査の結果、12号墳は石室の中心と馬蹄形溝の底部から反転して、直径10mの円墳に復元される。

(3) 内部主体（図36～38）

12号墳の内部主体は、南側に向かって開口する横穴式石室である。玄室主軸はN-5°-Eを測る。石室は、奥壁と右側壁の一部を留めるに過ぎず、規模や構造について不明な点が多い。

玄室

玄室は大きく破壊され、奥壁の腰石と右側壁の2～3段目の一部を留めるに過ぎない。使用される石材は、全て小振りな花崗岩の転石及び割り石である。

奥幅は、右側壁が全く遺存しておらず明確にできないが、石材の抜き取り痕や根石の状況等から、約98cmと推定される。奥壁腰石には2石を使用している。右側壁側の石材が大きく、高さ80cm×幅80cm×厚さ40cmを測る。底部は平坦で、縦位に立てて使用している。左側壁側の石材は、小砾の上に高さ50cm×幅30cmの石材を立てて使用している。2段目の石材が僅かに残るが、非常に小振りである。

右側壁は、奥壁に挟まれるように構築されている。右側壁長は、前半が削平され不明で、腰石には高さ40cm×長さ80cm程度の石材が2石遺存しているが、使用個数は不明である。2段目以上の石材は非常に小振りであり、横方向に目路が通っている。

床面には、石室基底面の上に橙褐色粘質土が10cm程度盛られていた。敷石の有無は不明である。羨道および閉塞施設も遺存していない。

石室基底面の状況

石室基底面の状況は、石室床面の埋土を完全に除去して観察した。周壁に沿って、腰石の安定を図るために浅い掘り込みが巡る。根石は確認されなかった。

(4) 出土遺物

須恵器片などが僅かに出土しているが、細片のみで図化に耐えない。

4. 焼土坑

10号墳及び12号墳の墳裾で、焼土坑を3基検出した。いずれも上面が大きく削平されており、遺存状況は良好でない。

(1) SK-01(図39、40)

SK-01は、10号墳の墳丘Ⅲ区南側裾部で検出された。土坑の掘方は、尾根筋の斜面等高線に対してもほぼ垂直に掘削されたと考えられる。主軸はN-53.5°-Wを測る。掘方平面形は、やや不整形な隅丸長方形を呈するものと推定されるが、端部が削平されており不明確な部分がある。また上面も削平されていると考えられる。長さは188cmが遺存し、幅は最大140cmを測る。基底面は10号墳の地山整形面の傾斜に従って10cm程度の比高差があり、掘り込みは垂直に行われたものと考えられる。覆土は3層に分層でき、各層に炭化物片や焼土壁片等が含まれる。側壁の一部が焼土化し、赤変して硬化している。

床面付近から底部糸切りの土師器が出土しており、出土遺物の年代から中世の所産と考えられる。

出土遺物(図39)

11は口径10.6cm、器高1.5cm、底径6.6cmに復元される小片である。胎土は精良で、色調は明るい灰みの橙褐色。

(2) SK-02(図39、41)

SK-02は、10号墳墳丘Ⅱ区北側墳裾と12号墳墳丘Ⅲ区南側墳裾の境界付近で検出された。10号墳Ⅱ区の馬蹄形溝が、ある程度埋没した段階で掘削されている。土坑の掘方は、10号墳墳丘の等高線に対してほぼ垂直に掘削されたと考えられる。主軸はN-26.0°-Wを測る。平面形は長さ110cm、最大幅90cmを測る不整形な隅丸長方形を呈する。基底面は、10号墳の地山整形面の傾斜に従って20cm程度の比高差がある。掘り込みは、ほぼ垂直に行われたものと考えられるが、奥壁部はやや内傾気味に掘削された痕跡が確認できる。覆土は1層が残るのみであり、覆土内には多量の炭化物片が含まれている。側壁の一部が焼土化し、赤変して硬化している。

覆土内からの出土遺物は、確認されなかった。

(3) SK-03(図39、42)

SK-03は、12号墳墳丘Ⅲ区の馬蹄形溝内で検出された。掘方は、尾根筋の斜面等高線に対しほば平行であると考えられる。主軸はN-50.5°-Eを測る。平面形は長さ210cm、最大幅184cmを測る。

円形を呈する。基底面は12号墳の地山整形面の傾斜に従い、約25cmの比高差がある。掘り込みは垂直に行われ、上面が大きく削平される。覆土は4層が残り、うち2層に炭化物片が含まれる。床面も側壁も焼土面は検出されなかった。出土遺物はない。

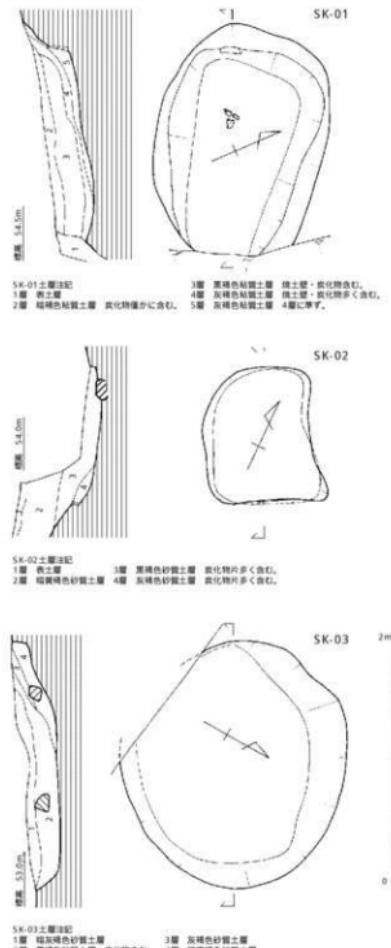


図39 焼土坑および出土遺物実測図(縮尺 1/40、1/3)

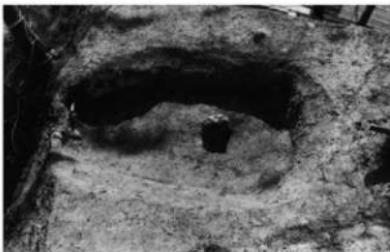


図40 SK-01全景(北東から)

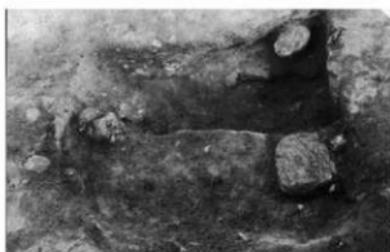


図41 SK-02全景(西から)



図42 SK-03全景(北東から)



第4章 まとめ

今回の調査では徳永古墳群H群のうち、10号墳および12号墳の2基の調査を行った。両基は、馬蹄形溝の切り合い関係が確認され、10号墳→12号墳の順番に築造されていることが判明した。出土遺物から、10号墳の築造年代は、概ね6世紀後半代と推測される。12号墳からは出土遺物がなく、築造年代を明確にできないが、10号墳に後出しし、石室の規模や使用石材が小さいこと等から、7世紀代の可能性が考えられる。

H-10号墳は、前面が大きく破壊されており、遺存状況は良好といえないが、墳丘の構築過程において様々な情報を提供する結果となった。

徳永古墳群H群は総基数27基の円墳で構成され、これまで5次18基の発掘調査が行われてきた。古墳群はその分布状況から、北側に立地する15~25号墳の一群、やや中央に位置する10~14号墳の一群、南側に立地する3~9号墳および26~28号墳の一群に大きく分けることが可能と考えられる。

このうち最も北側に位置する一群のうち、15~21号墳は、1979年に発掘調査が実施された。築造年代はそのほとんどが6世紀後半を主体とし、7世紀代と推定される小石室墳も検出されている。墳丘規模は概ね10m前後のものが主体だが、うち18号墳（1979年の調査段階では、徳永アラタ3号墳とされる）は、墳丘の直径が14mを測り、この一群中の他の古墳を凌駕する。また、18号墳の内部主体は、唯一の両袖式複室の横穴式石室で、玄室長3.3~3.45m、石室長は6.96~7.83mを測り、巨石を用いた大規模なものである。

また南側の一群は1991年~1992年にかけて6~9号墳および26~28号墳が発掘調査された。築造年代は26号墳が最もはやく、5世紀末から6世紀のはじめに構築されたと考えられている。26号墳の内部主体は、竪穴系横口式石室で、玄室長2.25mを測る。石室内からは三葉環頭大刀が出土しており、支群中の首長墓の一つと目される。またこれに後続する6、7号墳は墳丘規模が14mを測り、やや大型円墳と考えられる。内部主体は、6号墳が玄室長1.95mを測る横穴式石室であるが、玄室平面形が狭長であり古相を留めているものと

考えられる。7号墳は、玄室長が3.15mを測る横穴式石室を有し、石室規模も大型といえよう。

今回調査を実施した2基を含む一群は、14号墳が既に消滅していたが、11号墳および13号墳も2002年に発掘調査された。本報告が未刊行であるため詳述は避けたいが、概ね直径10m前後の円墳群である。10号墳の墳丘は2段築製で直径15mを測り、本古墳群で調査された円墳の中で最大規模と考えられる。

10号墳の構築過程は5ないし6工程に分かれており、非常に丁寧な版築状の盛土と外護列石を多用している。墳丘構築の際には祭祀を執り行った痕跡が確認され、構築に際しては非常な時間と労力を費やしている。

特に盛土の工程については、調査に際し慎重を期し、可能な限りその構築過程を確認し記録するよう努めた。墳丘はその石室主軸に沿って南北方向に大きく削平されていたので、この部分を利用して土層を観察し、構築過程を確認した。版築状の盛土は、石室に近い墳丘内部がきわめて丁寧であり、石室被覆を目的とした第1工程で構築した内部の墳丘を数次にわたり更に覆うように盛土を繰り返している。内部墳丘の外周には、土手状の盛土と溝を構築し、当時の土木技術の考察について興味深い示唆を与えるものであるが、今回の報告では時間的余裕がないので、今後の課題としたい。外護列石に関していえば、墳丘構築後も外面に列石が露出している状態であり、視覚的効果を狙ったものと考えられる。特に、北側の集落遺跡である女原遺跡からは仰ぎ見ることができたと考えられる。また、内部主体は前半が大きく破壊されており、複室の有無は不明であるが、玄室長が320cmを測り、18号墳に次ぐ規模を有すると考えられる。

今宿古墳群では、丘陵の先端部分に構築される6世紀前半まで在地の首長墓系譜とは異なる、6世紀後半代以降に勃興する新興勢力の存在が指摘されている。10号墳の被葬者については、内部主体からの出土遺物が皆無であり、その性格について言及することが困難だが、石室規模や墳丘の構築過程の精巧さから、このような新興小首長墓的な性格が想定される。

報告書抄録

ふりがな	とくながこふんぐん よん					
書名	徳永古墳群 4					
副書名	徳永古墳群 H 群第5次調査報告書					
巻次						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第913集					
編著者名	松浦 一之介					
編集機関	福岡市教育委員会					
所在地	福岡市中央区天神一丁目8番1号 電話 092-711-4667					
発行年月日	平成18年12月28日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)
とくながこふんぐん 徳永古墳群 こじく 次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 じしょく あおあざとこなが 西区大字徳永 あおあらた 字アラタ	40130	33° 34' 07"	130° 15' 35"	2003.11.04 ~ 2004.01.20	524.5
所 収 遺 跡 名	種 別	時 代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
徳永古墳群	墳墓	古墳時代	古 墳 焼土坑	須恵器 土師器	古墳時代後期の大型円墳を含む群集墳2基の調査。 墳丘の構築過程が非常に丁寧であり、首長系列の 墳墓と推定される。	

徳永古墳群 4

—徳永古墳群 H 群第5次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第913集

平成18年12月28日

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8番1号

電話 092-711-4667

印 刷 弘文社印刷株式会社

福岡市博多区住吉三丁目8番17号

電話 092-281-1775